

絶対王政・激情・オペラ

: バロックの音楽 (1600-1750)

サウンド・デザイン演習 (第5回 講義)

講義担当: 石井拓洋

ishii05042@venus.joshiu.ac.jp

2013-06-13

バロックとは「音楽がドラマになった時代だ」といってもいい。

[岡田 : 69]

[モンテベルディは、ルネサンス音楽に対して]

歌詞内容の劇的な表出を目指す自分の音楽を対置させた。

[同上]

バロックの音楽の時代背景

- 時代 (1600-1750)
 - ルネサンス音楽(1200頃-1600頃) のあと。
- 政治的背景 = 「絶対主義」
 - 16C-18Cのヨーロッパ
 - 国王が行政・司法・軍事等を、誰の制約も受けず行使する政治体制
 - オーストリア「ハプスブルグ朝」 (マリー・アントワネットの実家)
 - フランス 「ブルボン朝」 (ルイ14世 太陽王 在位 1643-1715)
 - ロシア 「ロマノフ朝」
 - イギリス 「チューダー朝」

バロックの音楽の時代背景

- 絶対王政の背景

- 「王権神授説」 [松宮：79]

- 神から王権を付託されたとする考え。これに基づいて
国王はローマ教皇の権威から独立し、人民を支配した。

- 新約聖書「ローマの信徒への手紙」第13章
(絶対王政の理論的根拠の一つといわれる)

- 「人は皆、上に立つ権威に従うべきです、今ある権威はすべて神によって
立てられたものだからです。従って、権威に逆らう者は、神の定めに背く
ことになり、背く者は自分の身に裁きを招くでしょう」

バロックの音楽の時代背景

- ・ 場所 → イタリア (フィレンツェ, ローマ, ナポリ)



ドイツ圏 (ザクセン, ウィーン)

- ・ 「バロック」 *baroque* の 美意識

- バロック とは「いびつな真珠」の意味
- ルネサンスと比較して「美術の趣味が悪い」という否定的な語
- ルネサンス (調和の美) ⇔ バロック (劇的な美)

イタリア・バロック美術の代表
ベルニーニ 彫刻と建築『聖女テレサの法悦』 (1645-1652)



イタリア・バロック美術の代表

ベルニーニ 彫刻と建築『聖女テレサの法悦』 (1645-1652)



イタリア・バロック美術の代表

ベルニーニ 彫刻と建築『サン・ピエトロ大聖堂前の列柱廊』(1607-1615)



バロックの音楽

Q.

バロックの音楽を代表する作曲家といえば？

バロックの音楽

A . (想定される模範的解答)

J.S.バッハ、Johann Sebastian Bach (1685-1750)

バロックの音楽

J.S.バッハ、Johann Sebastian Bach (1685-1750)



- 🔊 《マタイ受難曲》 BWV 244 - 第1曲 合唱「来たれ、娘たちよ、我と共に嘆け」
- 🔊 《2つのヴァイオリンのための協奏曲 ニ短調》 BWV1043 「第1楽章」

バロックの音楽

G.F.ヘンデル Georg Friedrich Händel (1685-1759)



《オンブラ・マイ・フ Ombra mai fù》 歌 : 中丸三千繪 Michie Nakamaru

<http://www.youtube.com/watch?v=e03BhP3Pm7A>

バロックの音楽

A . (想定される模範的解答)

J.S.バッハ、Johann Sebastian Bach (1685-1750)

バロックの音楽

A .

J.S.バッハ？

もちろん、バッハは
この時代において無視出
来ない優れた作品を残した。

一方、、、

バロックの音楽

A .

J.S.バッハ？

この時代の音楽様式を
特徴づけるという点では

必ずしも
「典型的な作曲家」
とは言い難い。

時代様式がとらえにくい バロック音楽

「バロック音楽史の見取り図をややこしくしているのは、
バッハという『時代の最も偉大な作曲家』が
必ずしも文句無しに『時代の最も典型的な作曲家』
とはいえない点にある」 [岡田：85]

「バッハのイメージでバロック全体を代表させるようなことは
しない方がいい」。

「バッハは古風なスタイルになりつつあった」

[岡田：86-87]

それでは、
「バロック音楽」の時代の内実とは？

2つの側面から探るバロック音楽

1. 社会機能的側面

2. 美学的側面

バロック音楽の社会機能的側面

この時代 (16C~18C) の 西欧の「社会」とは
「絶対王政」の時代

フランス「ブルボン朝」 ベルサイユ宮殿



フランス「ブルボン朝」 ベルサイユ宮殿



フランス「ブルボン朝」 ベルサイユ宮殿



フランス「ブルボン朝」 ベルサイユ宮殿



フランス「ブルボン朝」 ベルサイユ宮殿



オーストリア ハプスブルグ朝 シェーンブルン宮殿



ハプスブルグ帝国皇帝の離宮。世界遺産。（ウィーンの名所）

オーストリア ハプスブルグ朝 シェーンブルン宮殿



ハプスブルグ帝国皇帝の離宮。世界遺産。（ウィーンの名所）

バロック音楽の社会的機能は第一に

王様を称える音楽

ルイ14世 と 作曲家リュリ



ルイ14世「太陽王」在位 1643-1715
バレエ好きなフランス国王



ルイ14世の宮廷楽長。イタリア生まれ
フランス貴族社会で権勢をほしいままにする

ルイ14世 と 作曲家リュリ

映画『王は踊る』

(*Le Roi danse* , 2000制作, ジュラール・コルビオ監督, ベルギー)

- 作曲家 リュリの生涯を描いた映画
- 当時の宮廷と音楽との関係がよく描かれている映画
- 1653年に宮廷で自ら「太陽王」に扮して上演した「夜のバレエ」

※ ルイ14世は背を高く見せるために「ハイヒール」をはくことを好んだ。映画でそれにちなんだ描写もあり。

バッハとバロックの関係

ルネサンス = キリストのための音楽

バロック = 王様のための音楽

バッハ = ?

バッハ とバロックの関係

ルネサンス = キリストのための音楽

バロック = 王様のための音楽

バッハ = **キリストのための音楽 (旧)**
ただし、プロテスタント(ルター派)

バロック音楽の**美学的側面**

バロック音楽の美学的側面

歌詞の内容伝達を重視する音楽

バロック音楽の美学的側面

歌詞の内容伝達を重視する音楽

音楽サークル「カメラータ」

- ルネサンスの流れでギリシャの古典が研究
- 詩と音楽の理想的融合の範 → ギリシャ悲劇
- ギリシャ悲劇の復興を目指した。
- 作曲家 カッチーニ や ガリレイ (ガリレオの父) など

バロック音楽の美学的側面

歌詞の内容伝達を重視する音楽

音楽サークル「カメラータ」 (1600年頃, イタリア・フィレンツェ)

- ルネサンスの流れでギリシャの古典が研究
- 詩と音楽の理想的融合の範 → ギリシャ悲劇
- ギリシャ悲劇の復興を目指した。
- 作曲家 カッチーニ や ガリレイ (ガリレオの父) など

→ 「オペラ」の誕生

バロック音楽の美学的側面

歌詞の内容伝達を重視する音楽

- ルネサンス音楽(対位法の音楽)は
歌詞が聞き取れないからバロックでは嫌われた。

バロック音楽の美学的側面

そこで

バロック音楽の美学的側面

一人の歌手と楽器の伴奏の、
歌詞が聞き取りやすい音楽の形が生まれた

→ 「モノディー様式」

オペラの「レチタティーヴォ」と「アリア」へ

バロック音楽の**美学的側面**

【聞き比べ】

パレストリーナ（ルネサンス期，対位法様式）



《ミサ・ナシェ・ラ・ジョイア・ミア Missa Nasce La Gioja Mia》 - Kyrie (1590)

A. スカルラッチェイ（バロック期，モノディ様式）



アリア《董 すみれ》 - 歌劇「ピッコとデメートリオ」より

バロック音楽の**美学的側面**

【概略】

ルネサンスにおける古典研究



ギリシャ悲劇の復元（フィレンツェの音楽サークル「カメラータ」）



歌と伴奏の形（「モノディー様式」→「レチタティーヴォ」や「アリア」）



感情表現の追求

「オペラ」の誕生

バロック音楽の**美学的側面**

世界初の本格的オペラ

オペラ『オルフェオ』(1607)

作曲：クラウディオ・モンテベルディ (1567-1643, イタリア)

バロック音楽の**美学的側面**

世界初の本格的オペラ

オペラ『オルフェオ』(1607) 作曲：モンテベルディ

【あらすじ】

- ・ 古代ギリシャ時代、オルフェオ(男) はエウリディーチェと結婚
- ・ しかし、妻エウリディーチェは毒蛇にかまれて死ぬ
- ・ 悲しむオルフェオは神に頼んで 天国から妻の奪取を試みる
- ・ 神からの条件は、帰路にて妻の顔を見ないこと
- ・ オルフェオは天国からの帰路に妻の顔を見てしまう
- ・ 妻は消える。
- ・ そこで、オルフェオ自身も天国へ行って妻と暮らす。

バッハとバロックの関係

ルネサンス(対位法)

バロック(歌と伴奏, モノディー)

バッハ ?

バッハとバロックの関係

ルネサンス(対位法)

バロック(歌と伴奏, モノディー)

バッハ 対位法 (旧)

世界初の音楽学校

～ イタリアの港町の孤児院

- ・イタリアの「ナポリ」と「ヴェネチア」に設立。（16C）
- ・2都市は港町。港町には捨て子が多い。
- ・イタリアは、そのような捨て子に、自立の道をつくるために音楽学校をつくり、彼らに教育を与えたという。
- ・ナポリの「ピエタ孤児院」（音楽学校）では、ビバルディが教えていた。
- ・ヴェネチアでは、『董（すみれ）』のA.スカルラッティが教えていた。
- ・優秀な生徒は、イタリア・オペラの歌手としてデビューした。
このような、孤児の自立のための音楽学校が、イタリア・オペラを支えた。

参考文献

- 松宮秀治 (2008)『芸術崇拜の思想：政教分離とヨーロッパの新しい神』白水社
岡田暁生 (2005)『西洋音楽史』中公新書
ドナルド.H.ヴァン.エス(1970=1986)『西洋音楽史：音楽様式の遺産』新時代社
片桐功・他(1996)『はじめての音楽史』音楽之友社
石井宏 (2004)『反音楽史：さらばベートーヴェン』新潮社
N.アーノクール(1982=1997)『古学とは何か：言語としての音楽』音楽之友社

Web「マティアス・ヴェックマン」 (Retrieved 2012-06-11)

<http://www.geocities.co.jp/MusicHall/4053/weckmann.html>